

から、照子は此子に學問させる事許り考へた。照子は餘り人と交際もせねば、世間の事も知らず、世間を知らねば浦山しいと思ふ事もない。只學問がさせたいとばかり思ふ。それは自分が、とうとうろくな教育は受けずにしまつて、今の身の上になつたのではあるが、兎に角親に學問の事ばかり言つて育てられた爲めかも知れない。澄一が出来てからは、世間で學者に二代はないなどといふ話を聞く度に、當人の天賦は知らず、わたしは出来るだけの力を竭して育てて見せると、少しは無理と思つても、復習は必ずさせ、人が「一人のお子をそんなに厳しく爲さらいでも」と云ふと、「一人しか有りませんからなる丈善くしたいと思ひまして」と云ひ通した。

夫は自分のかうするのを只黙つて見てゐる。或時「わたしはかう思つて育ててゐますが」と云ふと、夫は暫く考へてかう云つた。「此頃は人を育てるに本能を殺さないやうにとか、自然を傷けないやうにとか、色色の事を言ふ學者もある。それも所謂開化を咀つたルソオ以來随分久しい事である。併し人間に生れて来て、文明に貢献する所のないやうな事では、生甲斐はない。それには學問をさせねばならない。學問をさせようとするには、どうせ無理に叩き込むやうな工合にもなる。それも好かろう。さうせられた本人が成功しないでも、教へられた事は決

して無用ではない。遺傳で次のジネレクションへ傳はる。本人が文明に貢献しなくても、其子孫が文明に貢献する。今の世の奴等は、生活の自覺さへあれば、實際自暴自棄に遣つて行つても、其自暴自棄の自覺に價値があるやうに云つてゐるが、そんな馬鹿な理窟があるものか。それよりは寧ろ夢中で脳髓を或方向に發展させた方が、人類の爲めになるかも知れない。遣れ遣れ」と云つたのである。

夫の詞は少し激して言つた所もあるやうには思ひながら、自分は矢張無理な勉強をもさせてゐた。もうそれが二十年間になる。ああ、可哀相な事をした。萬一の事でもあつては、次のジネレクションどころではない。年がやつと足るや足らぬのに試験をさせて、地方の高等學校などへ入れねば好かつた。何か地方の病を受けたのかも知れぬ。若しさうなら、皆自分のせいである。今一年置けば、東京の學校へ入れられたのに、ああ、悪かつたと留めどもなく考へた。がたがたと云ふ音に振り返れば、外は風が立つて、硝子窓から見える中庭の、落葉した木や、霜避をした蘇鐵が寒さうに風に吹かれてゐる。窓の硝子へ砂がばらばらと當る。二つばかり見える煙突の煙は風で横に靡いてゐる。

入口の戸が明いて、「大變お待せ申しました」と院長が遣入つて來た。すらりとした瘦がた

の、眉の薄い、鼻の高い、細面で、金縁の目鏡を掛けた、立派な紳士である。ベルを鳴らして小使を呼ぶ。

「お茶を持って来い。」

「どうぞお構下さいませんやうに。」

「いえ。私も飲みたいのですから。今日は少しお話がしたくて、お忙しい所をお待せして済みませんでした。」

照子は胸がどきりとした。

「いかがでございますう。」

「實はあまり思はしく無いのです。御主人の御不在ではあり、申し上げまいかとも思ひましたが、お兄い様以来の御交際の上、貴方の御氣性も薄薄知つてゐますから、却つて申し上げて御相談いたした方が宜しいかと思ひまして。」

「何病でございますう。」

「一昨日初診の時には、確には分かりませんでした。ぶらぶらしてお出の時間が長かつた様ですし、其上心臓が餘り面白くありませんから、休暇中なのを幸、入院をお勧めしたのでした。お

宅では兎角我儘になりますから。」

照子は「我儘などはわたしはさせません」と云ひたかつた。院長は小使の持つて来た茶を飲んで、雪の様なハンケチで口を拭ひながら語り續けた。

「ところが、凝集反應の結果、輕症ながら窒扶斯と認めました。なに至つて輕いので、もつと初から御診察をしてゐて、何病か何病かと思つて、やつと分かつたのなら、ちつとも御心配などはありませんが、私は心臓の様子といひ、種種の兆候で、再發らしいと思ひます。初度は御當人も御存じなくて濟んだのでせう。唯その直り際に少し無理があつたと見えます。」

「まあ、そんな窒扶斯がございませうか。醫者の家で育ちましたも一向存じませんで。」

「外來性窒扶斯、逍遙性窒扶斯などと申します。歩いて外來へ來るのがありますよ。讀んで字の如く、歩きながらも遣つてゐますのです。好く注意せんと、不意に腸出血で倒れますから。」

見事な出來の煙草入から、埃及の金口を出して火を付け、緩く煙を吹くのである。薄い煙は部屋の隅の室咲の梅の方へ靡いて行く。やがて煙草を皿に置いて、院長はかう云つた。

「御息のは、まあ、さういふ風なのを一度なすつたらしいと思ふのは、心臓の悪さです。用心してデキタリスを上げて置きます。此病氣としては輕症ですが、併發、繼發なんといふこと

もありませんから、萬一の事はお受合出来ません。それで御相談は、先生はお留守中なり、大學へ御勤めになつてゐるのに、其方の病院へお入れにならないで、この微微たる病院で、萬一の事がありましたは、皆さんに申譯がありません。若し御移轉になるならば、一時も早くなさらんと、愈々御病人に障りますから、好く御考なすつて戴きたいのです。」

ここまで聞くうちに、照子は胸のうちでとつおいつしてゐたが、聞いてしまつたときは、最早驚かぬ。室扶斯と云はれても、危いと云はれても、平氣で話をしてゐる。平生他人の前で、決して物に驚いた様な風は見せたくないと思つてゐるので、何か事の起つた時は、二つ三つ成行を考へて見て、一番悪い方になるものと極めて置く。さうすれば、一番悪い方になつても、落ち着いてゐることが出来る。大抵は思つたより善い方になつて、心配は無駄になることが多い。こんな風で人の前で涙を翻さずに済みます。實はどんなに悲しくても、決して泣くまいと思へば、泣かずに済む。其辯獨で本などを讀んでゐると、詰まらぬ事に紙の上へ涙を落すことがある。併しそれ丈で、人が涙は女の武器だなどと云ふと、そんな女がどうなるものかと思ふ。顔ぢゆう涙だらけにしたり、聲を立てたりする人を見ると、其事柄は氣の毒でも、どうしてあんなに涙が出るかと思ふのである。

「思召の程はよく分りました。色色御心配下すつて難有うございます。電報で相談と申しましたも、雪國ではあり、郵便局も遠いと申すことで中中急にはまわりますまい。其上病人の事は一時を争ひます。私だけの考では、御存じの通り、兄もお世話になつて満足して亡くなりましたし、貴方のお骨拵を願へば、假令どういふ事が有りましても、少しも不満足はないと思ひます。併し此病院は傳染病の人をお入れになる筈では無いのでございますから、私がどんなにお願ひしたくても、他の多くの方々の御迷惑になりましては、相済みませんから、唯今から電話を拜借して聞合せまして、大學の方へお願ひしたいと思ひます。」

「いや。其御心配には及びません。固より他の患者に迷惑の掛かる様な容體ではありません。注意せねば分からぬ位の病氣です。只長いので、體の衰弱と心臓の悪いのが氣になります。先程廻診のとき脈は百十でした。至つて面白からんのです。貴方が此病院でも好いとお考になれば、私は力の限り盡して見ます。御病人の爲めには絶待的安靜が今必要で、動かすことは望ましくありません。今朝程お友達がお見えになつたとかで、その爲熱が上りました。面會謝絶の札を今貼らせました所です。」

「左様でございますか。色色御心配下すつて難有うございます。御迷惑にならぬなら、どうぞ

此儘お置き下さいまし。主人には早速手紙で申して遣はしますかち。」

照子は座を立ち掛けて、念を押した。

「病人に病症をお話しになりましたか。」

「いや。お聞きですが申しません。今暫く分からん様子だと仰しやつて下さい。」

照子は禮をして部屋を出た。二階へ上らうとすると、大きな時計の傍に、「階子段は静かに昇降すべし」と大きく書いた紙が貼つてある。昇つて左へ曲つて突當りが七號で、澄一の部屋である。今貼つたらしい面會謝絶の札が目につく。静かに戸を開けて這入れば、澄一は眠つてゐる。一日見ぬまにめつきり病人らしくなつた。附添の看護婦に初めて逢ふ。色の赤い丈夫さうな女である。叮嚀にお辭儀をする。黙つて禮を返して静かに、寢臺の傍で様子を見てゐる。こゝは特等室で、十疊の間の真中に寢臺が据ゑてある。東南の二方面が窓で、明るい日が窓掛を透して病人の顔に當るので、附添はそつと立つてそれを直す。澄一は目を開いた。

「気分はどんなです」と、照子は椅子を寄せた。

「あ。おつ母さんですか。嗽をさせて下さい。」熱で口が渴いて、物が云ひ憎さうである。附添は硝子器の口の長いので、薬と鐵瓶の湯とをませて嗽をさせる。吐き出す器には薄赤い水が

入れてある。消毒薬だと思ふ。附添は窓の傍に行つて、火鉢に炭斗から堅炭をついでゐる。

「大變遅くお出でしたね。さつき小林さんに下で聞いてもらつたら、先程御出になつたが、今先生とお話中だと小使がいつたさうです。待遠しかつたので、うとうとしました、何かお話がありましたか。」

「ええ。まだ初でよく分らないが、熱があるし、心臓が弱いし、安静にしてといふお話でした。なるだけ静かに、眠られるなら、お眠りなさい。」

「晝はなる丈起きてゐたいのです。夜寝られぬと苦しいから。」

待つてゐたと云ふのに、話をする勢もなく、又うとうとするらしい。照子は火鉢の傍に寄つて、附添に聞いて見た。

「小林さんですつて。お世話になります。夜はよく眠りますか。」

「はい。よくお休になります。」

窓から見ると、横手の二階の病室は皆塞がつてゐるらしい。日がさすので、白い窓掛が引いてある。小鳥の籠や植木の鉢が日向に出てゐる。明日は草花でも持つて來ようと思ふ。暮れる迄附いてゐる。折折目を覺ましては嗽をする。

「おつ母さん。伯父様の入院なすつたのはいつでしたね。」

「あれは一昨年暮の二十八日でした。」

「そして正月の十日にお亡くなりでしたね。僕も同じ日に入院したが、十日頃にはどうなるでせう。」

「其頃は退院しますさ」と笑つて見せるのが、照子は苦しかつた。

彼此する中電燈が附く。

「おつ母さん。お歸なさい。道が寂しくなりますよ。」

「なに。寂しくても好うござんす。もう少しのませうよ。」

照子がかう云つたが、原町の家の寂しさ、若い女ばかりの留守居なのに、年末の盜賊沙汰の多いのも氣になる。

「ではわたしは歸りませう。又明日早く來ますから。大事になさいよ。」車を呼んで貰つて出た。

風は凪いだ。星は寒空にきらきらと輝いてゐる。師範學校の横手から木の間を通して、遙かに病院の灯が見える。澄一の部屋の灯はどれだらうかと思ふ。大抵は大丈夫だとは思つても、

一日見ぬ間に顔の變つたのが氣になる。院長の手際をば深く信じて、不安の念が胸を閉ぢて、何とは無しに涙が翻れる。大分時が過ぎたと思ふのに四邊は大變暗い。まだ酒井邸の裏道を通つてゐる。車だと倍も無駄道になるのである。歸つて見れば、美代さんはランプの下で梅の造花をして居る。

大川の家は向ひも兩隣も皆博士である。世間では博士横町と云ふとの事である、立派といふ程ではないが皆相當の構をしてゐる。中で一番大川の家が見苦しい。其癖家も庭も一番廣いのである。向ひの家では電燈を引く。兩隣では瓦斯を引く。其上に電話が掛けてある。瓦斯管を埋め、電氣の柱を立てる度毎に、家の前は幾度となく掘り返される。文明の利器はいつも此家の前をば通り過ぎて、此家には這入らないのである。掘り返された跡は、赤土だから容易に直らぬ。石炭殻を敷いてはあるが、雨の日は車が上がらぬ。坂の下から歩かねばならぬ。かういふわけでいつ迄も大川の家は石油ランプである。博士は毎日暮れる迄學校にゐる。歸つて夜食をすれば、少し休む。それから書齋に這入る。ランプの下で、十一時頃迄は必ず勉強する。十時を打つて相圖に床に這入る。これが幾年間でも少しも變らぬ。終日學校だと思つて、用事のある人は學校へ行く。内へ來る客は極稀だから、此規則はくるはぬのである。「丸で時計の

様な體ですわね」と、照子は笑つてゐる。美代さんは田舎娘で、電燈や瓦斯の便利なことはまだ善く分からねぬ。大きなランプなら、「まあ明るいこと」と喜んでゐる。

「夜までお細工をするのですか。」

「兄いさんのお慰にならうかと思ひまして。」

「有難う。明日は何か草花でも持つて行きたいと思ひますの。ゆつくりで好いから拵へて下さいね。」

大川の内では正月の支度をせぬ。照子は「美代さん、折角のお正月をお氣の毒ですわね」といひながら、何もする氣になれぬのである。女中二人は近在のもので、餘り役には立たぬが正直だ。「お正月は島田に結ひませうね」と、早くから相談して、入毛を直すやら、根掛をお揃ひに買ふやらしてゐた。大晦日の晩に、照子は氣がついて聞いて見た。

「どうしたの。あんなに島田の支度をしてゐたぢやあないか。」

「どういたしましたして。若旦那様の御入院なすつて入らつしやるのに、氣樂らしくそんな真似は出来ませんから」といふのである。照子も只獨り奥の八疊の間で、除夜の鐘を寝られぬ枕に聞く時は、言はうやうなく寂しかった。

三箇日も病院へ行つて留守なので、誰一人座敷へ通る人もなく、毎晩數へて見る玄關の名札丈が百枚足らずある。別別に紙燃で括つて、日附をして置く。

一日二日で思ひの外熱は下がつた。庭の梅やら南天やら、鉢物には福壽草、西洋蓼、折折は美代さんの造花をも持つて行く。門松も取れて十日も過ぎる。まだ仰向に寝かして動かさずにある。食物はおも湯と梅びしほである。おも湯は寝た儘硝子の器で注ぎ込む。梅びしほは箸の尖に附けて嘗めさせる。澄一は一體おも湯は大嫌ひである。入院せぬ前は拵へて遣つても大抵は飲まなかつた。今は唯それが命の綱である。もう氣分は何んともない。退屈にはなつて來る。腹は透いて來る。漸く傳へて、友達が見舞ひに來る。成るべく逢はせぬ様にする。事務所で逢ふなら十分間と云はれて、皆さつさと歸つて行く。何か見たいと云ふ。ならぬと止められる。それなら新年の端書でもと云ふ。それもならぬと云はれる。友達から來た面白いのがあるだらうと懐かしがる。

博士が旅行から歸つて來た。程なく學校も始まつた。博士は日曜日だけ終日病院へ行つてゐる。跡は照子と美代さんと、一週間一日も缺かさずに行くやうにする。正月になつてから、天氣が悪い。雪が度度降る。車夫が坂で滑つて、落されさうになつた事もある。足駄の齒が折れ

て、コトから着物まで残らず汚す事もある。

美代さんの學校は半日の日がある。其時には、「叔母さん、お休みなさい」と行つてくれる。傳通院で電車を降りて、大塚の通りに行くのである。幾分か日は延びても、冬の日は暮れ易い。預り娘だと思ふと夕方は案じられて、途中迄迎ひに出す。跡は人手がなくてまごまごする。照子も早く澄一を退院させたいと思つて、院長に「何日頃退院が出来ませうか」と、おそるおそる問へば、「そんなお話は暫くお待ち下さい」といはれるのである。

三週間にもなるのにまだ少しも動かされないで、澄一もじれつたくなつて来る。美代さんは、自分の行つた日には學校の先生の話や、お友達の噂をする。地方からの人が多いと見えて、變つた話がある。照子は毎日の様なので、氣に障らぬ變つた話をする事はむづかしい。附添への土産にと、通りの松月と云ふ菓子屋へ寄つたら、髭を生やして髪を綺麗に分け、首にハンケチを巻いて長羽織を着た亭主がお菓子を出してきて、それ、おつりをと云ふとき出て来た上さんは、大分年を取つてゐるのに、赤い手柄を掛けた丸髷に大編の着物はまだ好いが、出掛と見えて小紋縮緬の引擦るやうな被布を着てゐたのに驚いたとか、お隣の隠居さんが目白を逃がして、それがこつちの邸へ這入つたと垣根の側に立つて居るのを女達に聞いて、御遠慮

なくお這入なさいと云はせると、手頃な棒を持つて来て、垣の内へ追ひ廻す。外ではお婆あさんが眞白な髪を風に吹して見て居る。息子さんが籠を持つて待つてゐる。往來の人が立ち留まる。隠居さんは夢中になつて、三十間もある檜木の植ゑ並べである間を駆け歩くと、鳥は驚いて飛び廻る。長く籠に馴れたと見えて、遠方へも行かぬ。とうとう何も見えなくなる夕方迄のたなど話す。いつも謠曲をうたつたり碁を打つたりする、品の善いお爺いさんの其の時の様子を想像して澄一は笑ふ。

毎日の様に通ふので、廊下で逢ふ人の顔をも見える様になる。退院した人の部屋だと見えて開け放して風を入れてあるのがある。澄一のゐる部屋がいつあんなになるかと思ふ。又いつ通つても硝子窓の暗い部屋がある。附添に聞くと、少し氣が變で、明るいとかましい事を仰しやるんですつて」と云ふ。恐ろしい事だと思ふ。耳の悪い患者だとかいふので、向ひの部屋へ這入つて来た女の子がある。五つ六つだとか、貌は見ねど、廊下に小さい赤い端緒の草履が見える。それと一しよに、大人の草履が幾足も脱ぎ散らしてある。おつ母さんに見えて、丸髷の羽織なしで、派手な帯を締めたのを見掛ける。前掛をした商人の手代らしい人が出入りする。中々騒騒しい。これは四五日すると退院した。又元の様に靜になる。澄一ばかりはまだ同じ様

で明かし暮らすのである。

澄一も段段じれつたくなつて來た。併し院長には言はれぬ。醫員に云つても爲方がない。父にも遠慮してゐる。美代さんなどは相手にならぬ。それを言ふのは照子にばかりである。顔を見る度に不平の限を竝べ立てる。

或日照子が二階に上がつて、何の氣なしに番號を數へて行くと、三號から五號へ飛んでゐる。澄一は七號にゐるのである。附添にわけを聞くと、かう云ふのである。

「此病院に限らず、どの病院でも、四號といふのはないのです。特別何號としてあります。やつぱり縁起でございませう。」

それを聞いてゐた澄一がかう云つた。

「いくら縁起で四號が無くても、かうしてゐては死にさうです。おも湯と梅びしほばかりで、それも起さないで注ぎ込まれては、實になる様には思はれないし、山羊乳もやつと二三日前から五勺ぢやありませんか。唯息の切れない爲めですね。いくら窒扶斯だつて、こんなにしないでだつて好いでせう。餘り情ないぢやありませんか。もう少しどうにかならないでせうか。聞いて見て下さいな。もう内の梅干はなくなつたのでせう。」

病院の梅びしほは美しい色をしてゐる。何か附色があるらしい。それ故舌に色が附く。照子は内の庭のを漬けて置いた梅干で拵へて持つて行く。注意して拵へるから、味が好い。おも湯にもわざと鹽を入れない位で、梅も多いと、食ひ過る。小さな蓋物で、少しづつ運ぶのである。

「なあに。澤山ありますよ。あの方の事だもの、食べて好くなれば、食べさせもなさるし、退院もさせて下さるのですよ。病院にゐるうちは、何事によらず、仰しやる通りにしてゐなくてはなりません。」

「もう天井の木理も數へ草臥れたし、窓から雲も見厭きたし、學校はさぞ進んだらうと思ふし、お父うさんは毎日出て入らつしやるのに、氣が揉めて爲方がありやあしない。これから幾日立つて退院出来るか、退院したつて、急に出られはすまいし、考へるとがっかりしてしまふ。院長も丹波學士も、醫員の人達も、此節はいつも同じ事ばかり言つてゐるのです。醫員の人達は遣つて來て、造花が綺麗だの、草花が好く咲いたのと、只云つて行く位なもの。ほんとにどうなるのでせう。」

癩積を起して、瘦せた手で額を押へてゐる。刈らうと思ふ實際になつて入院したので、濃い



眞黒な髪が延びて細つた首に被さつてゐる。色の淺黒い、鼻の高い顔が青ざめて、目が引つ込んで、鼻はいよいよ高くなつた。今日は少し曇つて日が當らぬので、窓掛はなく、中庭を隔てた病室の内が見える。中學の生徒だとかいふのが、寢臺の上に坐つて、雑誌を見てゐる。隣の室には美しい金屏風が見える。女の人が、これも寢臺の上に起きてゐる。お客と見えて、赤い立やの字の帯、派手な長い袖などが見える。

「浦山しいなあ。早くあんなに起して貰ひたいなあ。」

附添の小林さんも、もう馴染になつて、近頃は話をする。世話のない病人なので、食事の話か、火鉢へ炭をつぐ位の役である。此頃は炭斗でなく、黒い箱に部屋部屋の番號が書いてある。氣が附けば二三日前からは、看護婦が皆白い帽子を被り出した。院長が病院の改善に力を盡されるのが目に見える様である。

「そんなに浦山しくはございませんよ。もうお二人とも長く這入つて入らつしやるのですもの。中學のかたは、今日はお元氣に見えますが、少しお寒い日はお咳でお可哀さうですよ。御覽なさいまし。窓の傍に黄いろい切れが干してあります。あれは芥子をお貼になつたんです。好く寢汗が出ると見えて、婆あやさんがお召を干してありますよ。」

「それぢやあ詰まらないなあ。」

「お隣でもさうですよ。もう半年以上になりますの。附添の方のお話では、御一しよに二つお正月をしたと云ひましたから、お悪いのは餘程前から見えますの。去年の暮に退院なさる筈でしたが、お許しのない召上り物が障つたとかで、又お休みになりつ切で、此二三日やつとお起きになつたんですよ。お客様はお妹さんでせう。御病人はお直り際が大切ですよ。おう。もうお晝に間がありません。」

附添は驗温器を掛け脈を取つた。青ざめた手を持つ看護婦の赤く肥えた手。情ないコントラストである。「また今日も同じでございますよ」と表に附ける。「さあ、お薬をめし上れ」オブラートに包んで飲ませる。

程なく下では拍子木の音がした。

「ああかちが鳴りましたね」と看護婦は出て行く。

「あの音ばかり待つてゐます。」

「大變卑くなりましたね」と、照子は笑つた。

患者の食事は、院長の診察の時極まつて、それが賄へ通る。出來上がると、一一名札を附け

て置く。醫員が一通り引合して見て許すと、相圖に拍子木が鳴るのである。やがて例のおも湯と梅びしほに山羊乳が五勺添へてあるのが来る。跡片付をして附添は自分の食事の下りて行く程なく戸を叩いて開ける。看護婦が温度表を取りに来たのである。今日は午後廻診との事である。暫して看護婦長の齋藤さんといふのが這入つて来た。背の高い色の白い、大人しやかな人である。

「日に日にお快くて、結構でございます。」

「難有う。お蔭様で。」

齋藤さんはさつき附添の持つて行つた温度表を枕元に置いて行く。此病院では、朝夕が宿直醫員の診察で、院長と丹波學士とは隔日に視る。少しの變でも見落さぬ様に注意してある。温度表を手に取つて見る。一日六回の驗温に、脈搏、呼吸、尿量迄が青赤黒の鉛筆と墨とで美しく附けてある。重ねた紙には、獨逸語で病の経過が書いてある。やがて二階の向うの部屋に、院長や看護婦の姿が見える。病人は食事が増すかと楽しんで、順番の来るのを待つてゐる。

戸が開いた。すらりとした山本院長、太つて背の低い丹波學士、髭の生えた、背の高いのと、髭の無い、背の低いのと、醫員が二人、齋藤さんと副院長の山川さんとかいふのと、皆眞

白な服で、どやどや這入つて来た。院長が温度表を見て居る間に、附添が病人の帯を弛める。看護婦長が聴診器を出す。院長は胸から背に掛けて、丁寧に打診聴診をする。終りに腹を押して見てかう云つた。

「大分具合が宜しい。山羊乳を五勺増しませう。それで二三日遣つて見て、経過が好ければ、おまじりです。」

髭の生えた醫員がインキ壺を提げてゐて、食事の所へ書き込む。「お大事に」と云つて、揃つて出て行かうとする。

「まだ起きて食べるわけには行きませうまいか。」

「いや。暫く其儘です。」

澄一はがつかかりした様な顔をする。副長は黒塗の角い箱に籐の取手の付いたのを持つて、一番後から出た。診察の時にいる薬などが這入つて居るのだらう。

附いて出て見ると、今日は此部屋が終りと見えて、突當りの手洗湯で手を洗つてゐる。看護婦長がタオルを出してゐる。其傍に行つて、まだ何も云はぬ中に「奥さん安心です、もう御病氣はすっかり直りました、これからの養生が病氣以上に苦しいものです、よくお諭しなすつた

「いいでせう」と云つて、院長は下へ降りて行つた。照子は病室へ歸つてからかう云つた。

「澄一。もう何も云つてはいけません。院長は何もかも御存じです。入院の當座、内では我儘になると仰しやつた時、私はなんのと思つてゐたが、間違でした。それ位の容體になつて内に居れば、起きたいと云ふときつと内證で起すでせう。これからは病氣よりも苦しいといふ事です。どうぞ我慢して直しておくれ。」

「大事に大事と、入院してから四十五日を過して、二月十一日に漸く擔架で退院した。それ程注意した故か、退院後はめきめきと快くなつた。十六日頃は坂の床屋へ行つて来る。二十日過からは學校へ出て見ようなどと云つてゐる。あれほど恐れた病氣の事はもう忘れて、人は學問せねばならぬものと、親も子も言ひ續けてゐるのである。(完)」

## 綜

六月といつても、まだ這入つたばかりで、曆の梅雨には十日ほど早いのに、此二三日はじめじめと降り暮して、その心持の悪るさつたらない。もう實際梅雨になつたのかもしれない。冬中の汚れ物は皆解いて洗つてしまつたし、繼物も大抵出來て、もう半分がたは張り上げてある。「善く手廻しが出來て好かつたねえ」と、金井の奥さんは仲働に言つて喜んだけれど、御隠居が天氣を氣になさるのが氣の毒でならぬ。

それも其筈、明日はお客をする積で、それぞれ案内の端書が出てあるのだものを。

お客といつても大したのではない。昔の同藩の隠居さん達が集まるのだ。

戊辰の時に朝敵になつた越後の藩なので、官軍に追はれ追はれて、會津、仙臺と逃げ歩き、親に別れ子に離れ、幾多の悲惨な目に遇つた人達ばかりだ。亂の靜つた後故郷へ歸つてもなかなか生活の道がたたず、商人になつたのもあり、小學教員になつたのもあり、其外種種な業に

就いたけれど、大方は失敗に終つたらしい。さういふ苦しい中でも子供だけはと皆思つた。それで子供を修業させたといふよりは、志ある子供が修業したと云ふ方が本當であらう。

學費を出すことの出来たのは幾軒あるか。多くは學僕か何かをして慈悲深い人の助を仰いで、苦學したのである。勉強する人の辛苦はもとよりだが、親元でも人に學費食料の補助を得て、其上衣類迄は頼まれぬから、どんな貧苦の中からでも其世話だけはするのが、随分つらかつたらしい。

其子供達が、種種な道で兎も角も暮して行く様になつて、やつと一息ついた時、男親は男同士、母親は又其仲間で、東京に居るものだけ、折折寄つて昔語をしようと云ふ事になつた。男の方は幾年續いただらうか。もうとくに止んでしまつた。男は餘り長命の人がない故、古い昔を語り合ふ様な連れはなくなつたのかもしれない。金井の家では、まだ今の主人の修業中に父親は死んだので、男の會の事は知らぬ。

此會が始まつてから、もう十四五年になる。初めは十人餘りあつた。集めたらいくらもあつたのだらうけれど、成るべく話の合ふ様な、質素な生活の人でなくては、仲間に入れなかつたのだ。

長い月日の中に段段人数は減つて行く。今は五人になつた。地方へ移住する人もあつたけれど、それは一人であとは皆死んだのだ。それが一人死ぬ度毎に、残る人達は身の上にかかつた様に思ふのである。此次は誰だらうかと、互に暫くは不安の念に襲はれるけれど、程無く忘れて、「まあお氣の毒な」「御年に御不足はございませんから」などと、ただ一わたり知己の人が死んだのと同じに感ずる様になるのである。一番年上が七十八だ。若いと云ふのが七十だ。いつからともなく婆婆會と云ふ名がついた。

御馳走も決して料理屋からは取らぬ。皆家で煮焚する。成るべく昔故郷で食べ馴れた様にこしらへるのだ。紫蘇の白和、とろろ汁、がんじぎ胡桃の類である、これはがんせきではないかと思はれるのは、胡桃を砂糖と醤油で堅めた口取風のものである。會費と云ふものもなく、又お土産など持つて來ることなしの約束だ。唯一日集まつて話せば、それが満足なのである。

寒國の人は寒さを恐れるものである。衣類を重ねることは他國の人の察しの外のものだ。ましてお年寄のことだ。十二月から三月頃までは、何處の隠居さんもただ重ね着をして炬燵にあつて居るといふ。軒と均しく降り積んだ雪の中の、雪菰で包んだ家の内で、鴨居から一尺ほど透した間から漏れる光を便りに、炬燵へ這入つたり、綿つ子を背負つたり、夏中貯へて置く

食物を食べて春を待った昔の習慣が、まだ失せぬのであらう。「丸で蟻か毛蟲の様な暮しでしたね」とは、今もお婆あさん達がよく云ふ詞である。

四月頃からそろそろ動き出すのである。花の頃に、山口さんといふ家であつたのが初めてである。金井が三番目だ。梅雨に入つては困るからと、四五日前に通知を出したのに、降り出したのだから御隠居の心配するのも尤もだ。前晩から新聞の豫報ばかり氣にして居る。

夜中の大降りで上がるだらうと思つたのに、朝まだ小雨が降つて居る。御隠居は自分の部屋を丁寧に掃除して煙草の火を入れ、茶道具を揃へて、空ばかり見て居る。やがて臺所で女中を相手に支度をして居る奥さんの所へ来て云つた。

「どうだらうね。遠方の方もあるし、お年寄達の事だからお断りではあるまいかね。山口さんのお家であるといつても上天氣だが、あの方は後生が好いと見える。」

門の戸が開いた。御隠居は急いで行つて見る。

「まあ富山さんよく来て下さつたね。」

「楽しみにして居ましたから、もつと降つても上がりますよ。」合羽を脱ぎながら云つて居る、熱心なものだ。

此お婆あさんが一番質素な暮しをして居るのである。節袖の着物、鐵色の越後袖の羽織を着て居る。目鼻立の好い細面を、黄ばんだ白髪が品よく圍んで居る。お辭儀をする肩のあたりが瘠せて骨立つて居るのが痛痛しい。それで割合に丈夫なのだ。小さい時に両親に死に別れて、後繼の兄に子供が多く有つたので、兄の家の守代りに使はれた。容色も好く優しいので、嫁にと望まれた年盛りを體に構はず働いて居た。月日は遠慮なく立つ。同じ年頃の人は皆縁付いて子持になつた。其頃は又藩の中で嫁が出たり死んだりした家では、言ひ合せた様に貰ひに来る。随分過分な口も有つたのを斷つたので、呆れて話をする人の無くなつたのを、善い事にして使ひ廻した。大勢の末の子がやつと手が離れる様になつた時、貰ひに来たのが富山だ。其時兄は初めて行けと云つた。年取つた氣の優しい娘は、言ひ兼ねたけれど思ひ切つて云つた。

「兄いさん折角さう仰しやつて下さるけれど、富山は子供が四五人あるし、皆伶俐な人達だから、私の様な届かぬものが參つて、若し勤まらぬと、又御心配を掛けねばなりませんから、今暫くお置きなすつて下さいまし。」

居丈高になつた兄が云つた。「何だ。我儘な。人が折角嫁にやつてやるといふのに。ぐづぐづ云はずに行け。」

目上の人と云ふものは、随分都合の好いものである。とうとうなんの支度もなしに嫁入した。富山とは名ばかりで随分苦しい家であつた。繼子の爲めにも好い苦勞をしたものだ。其中男の子が一人出来た。國に居ても面白く無いといふので上京して、下宿屋を初めた。繼子もそれぞれ片付いて、少し息を衝いた時に、夫は虎列拉で死んだ。其跡を細細やつて居ると、人の善いを見込んで、食ひ逃げをせられる。居る人も拂をせぬ。唯一人の子をも學校へ入れ兼ねた。其中でも情のある人があつて、自分が造兵へ出て居るのだから、九つになる子を學校にも出されず、内に置く様なら連れて出てやらふと、毎朝背負つて行つてくれた。釘揃へをさせて、いくらかの錢を貰つて、又背負つて歸つて貰ふ事にした。其時から出初めて、三十餘年出て居る。今は信用もあり、學問せぬのだから、大した所には使はれぬけれど、小さく樂に暮して居る。四五年前に嫁を貰つた。それはそれはよく働く。お母さんは若い時から難儀なすつたからと、何一つさせぬ。心安い人は皆年頃心懸の善い報いだといつて居る。今年の春男の子が生れた。今は其守をするのが役なのだ。

「ほんとは清清して命が延びる様ですこと。このお廣い青青したお庭は結構ですね。家の込んだ神田邊では、縁日物の鉢植位しか見て居られません。」

「まあ邊鄙に住ふお蔭ですね。でもかう降る日は爲方がありませんよ。此間お節句にはお柏を澤山に有難うございました。孫がおやつに喜んで頂きました。」

「ほんの心ばかりでお恥かしうございました。」

「下の人達からお祝ひが来ましたでせうね。」

「四五人づつ組み合つたりなんぞして、なかなか立派なのを呉れましたので、段が狭くなりました。俵の小さい時の事を思ひ出して、嬉しいけれども涙がこぼれました。お配りした数は三十軒ばかり有りましたよ。」

細い煙管で煙草を吸ひながら、頻りに話して居る。瘦せて居るのに齒は幾年も前から一本もないのだから、其頬のこけて居ること。それでも食物は堅く無い物なら食べられる。聲は細いけれどもよく立つて、遠くまで響くのである。

門の開いた音がする。女中が取次に出ると山口さんの御隠居だ。家はあまり遠くなく、小石川の徳川邸の裏あたりだ。判事のお母あ様である。座敷へ上ると、「御近所なのに遅れまして」と仰しやる。

色が白いのに髪は雪の様だ。それが澤山あるから、晝にかいた様な御隠居だ。兩三年前亡く

なつた、お連合の御隠居が珍らしい立派な方で、竝んで居ると高砂の爺婆の様であつた。

「先達ては好うこそ。又今日は御邪魔に上がりました。」

「色色御馳走になりました。道の悪いのに恐れ入りました。」

御挨拶が済む頃、いつか雲が切れて薄日が漏れ出した。金井の隠居は大喜びでお辭儀に出た奥さんにかう云ふ。

「好かつたねえ。どんなに心配したか。此様子なら、お歸りの頃迄には、道も餘程好くなるよ。」それから山口の御隠居に云つた。

「貴方の御内でなさる時はいつも上天氣ですから、私は後生が悪いかと思ひましたが、これで安心しました。」

お茶を出して居ると車が二臺來た。山邊さんと清野さんの御隠居だ。これで人數が揃つたのだ。二人とも芝に住んで居る。電車で白山の終點迄來て、それから車で來たの見える。

山邊さんは陸軍少將の御隠居だ。少將は夫人と小さい子供を連れて任地に居る。大きい孫の學校に通ふ爲めに本宅に残つて居られるのだ。それはそれは太つて目も小さくなり、坐るのも苦しうだ。お孫さん達が象のお婆あさんと云ふさうである。

清野の御隠居は此仲間の年頭だ。氣性の勝つた人のせい顔も若若しく、まだ白髪も一寸見えぬ、知らぬ人に見せたら一番年下と思ふであらう。黒紋付の羽織で、改まつて挨拶なさる所は、本當に男らしい。さすがは北越の俊才と云はれた河井氏の妹だけある。まだ肉付も確りして、肩も張つて居る。皆が角いお婆あさんと名をつけた。

「まあ御遠方から、よくお早く入らつしやいましたね。私は出懸に人が來て、折角仕度が出来て居るのに、思ひながら遅れて、今上がつたばかりです。」と、山口さんは云ふ。

「電車は早いものですから。」と、山邊さんはいふ。

「そりやあ來た人の察しの無いのも悪いけれど、貴方も悪い。冬中はお互ひにお目にかかる折もなく、やつと出懸けられる様になつたのだから、今日はかう云ふ寄合でと、ちやんとことわつてお出になれば好いに。なに婆婆あなどに、逃れられぬ用事などは無い物でさあね」と笑つて居る。

「さうでございましたね」と、山口さんは云つて居られるが、其真似が出来さうではない。

「環一さんの奥さんの御病氣はもう御快うございますか」と、金井の隠居が聞く。環一さんは清野さんの次男で農學士で地方に住まつて居る。奥さんの三人目の産後が悪るかつたのだ。

「有難う。すつかり直つて、よく肥立しました。」

「政枝さんは御機嫌よくお勉めでございますか。」

「又是非にと頼まれて學校が一つ増したものですから、忙しい忙しいと申して居ります。電車が十分通じたので助ります。今日も私達二人では危いと云ひましてね、神田の學校へ行く時間の相間に、白山まで一緒に来て、終點で車を雇つて乗せてくれました。」

「お蔭様で御一しよに安心して參られます。夕方には學校のひけからここまで迎ひに来て下さいますつて」と山邊さんはいふ。

「まあ。お忙しい中で好くお世話が出来ますこと。」

「お氣性があんなに殿方の様に確りして入らつしやるのに、お優しい所へもお氣がつかますこと。」

てんでに褒めるも尤もだ。政枝さんは見た所は若いけれど、五十の方へ近いと思ふ。長らく米國へ留學してゐて、歸つて女教員をして居るのだ。早く父は死んで姉と弟とがあつた。姉えさんは優しい人であつたが、縁付いて不幸であつた爲め、家へ歸つてお母あさんや兄弟の世話をして居た。政枝さんは小さい時から男勝りの氣性で、女ながらも學問がしたいと思つたが、

維新の戦亂か終つたばかりで、男でもむつかしいのに、どうして稽古事がして居られよう。止める人もあり、笑ふ人もあり、相手にする人は無かつたけれど、利かぬ氣の政枝さんは、奮發して姑息の法ではならぬと、其頃やつと始まつた小學校の初等一年へ入學したのが、十八の時であつた。七つ八つの子供の間へまじつて、いろはを始めた。とてもかいなでの女の出来る業ではない。同級生はお母あさんお母あさんと呼んだ。學校でも破格の扱をして呉れた。卒業してから、いろいろ苦學をした。幾年かの後、高等師範學校を卒業して、所所に教鞭を取つた。其頃成長した弟の學費をも補助して、修業をさせてやつて、學士の名を成させたのである。それから弟に家事を托して、渡米した。それも官費ではないから自分の出来る事を教へては、學費を得て學んだ。それで割りに多くの年數を費した。漸く歸朝した時は、母は丈夫であつたけれど、優しい姉は世に無い人であつた。だから常に「私は盡す積だけれど、姉と違つて氣が付かぬから、お母あさんにお氣の毒です」といふ。お母あさんは又、「あんまり好く氣をつけてくれて、一寸出ても危ない危ないと云ふので、せつない様です」と云つて居る。實に美はしい親子中である。

「お迎ひでは大變ですね。こちらから電車迄はお送りしますのに」と金井の隠居は云ふ。



「乗つてからも危ないと云ふのですよ。乗換もありませんのに。」

「お互ひ様に年を取りますと、一寸出ても連れがないと心細く思ひますね。」

「怪我でもして、人の世話になつてはならぬと、つひ出るのがおつくうになりましたね」などと互に云ひ合つてゐる。

「一昨日は縁付いた孫が産をしまして、私も曾孫を持ちましたよ」と山邊さんは云ふ。

「おやおや。お目出度ございますこと。でも貴方は遅うございますね。私は三人ありますよ」と山口さんは云ふ。

「考へると古い昔でございますね、お互ひに懷妊中逃げ歩きましたのは。それに孫が産をする様になつたんですから。」金井の隠居も懷妊して居たのである。もう四十年からになる。

「あなたもあの時お中が大きくて、ところどころで御一しよになつた時、御難儀らしいとお氣の毒に思ひましたよ」と、山口さんは云ふ。

もうかういふ話は幾度も出るのだから、聞き古して居る譯だけれど、年が寄つて言つた事を忘れると云ふ計ではない。餘りつらかつた昔を思ひ出しても、今の苦のない境遇に引き比べて、一種の慰藉になるのかも知れぬ。

「お互ひ様に今の若い女達の様に、遠道などを歩き馴れないのに身重で山越でせう。いつも連には置いて行かれるし、日は暮れ掛かつて宿はまだなかなかだと聞く時などは、ほんとに涙がこぼれました。」

「私はよく馬へ乗りましたが、初めて乗つたものですから、お中へ響いて、心持の悪かつたこと。駕籠へも乗りましたが、人足に負はれたのが一番樂でした。なかなか上手に負ふものでね。」

「私はまだ月も少なく、其上丈夫なので、そんなに馬へは乗りませんでした。いつも遅れて宿へつきますと、先へ着いた人が爐のはたに入らつしやるし、子供は寄せて貰ひましても、あのなんといひましたか、高い山の上で泊つた時などは、逃げた儘で單衣の重ね着でせう。随分困りました。仙臺で綿入を買つてやつと樂樂しました。お連れがあればこそ我慢も出来ましたね」と、金井の隠居はいふ。

「あなたも仙臺でお買ひになりましたか。私も單衣へ裏をつけたり、綿を入れたりしました。私は子供は大きかつたんですが、年寄を連れて居たものですから、山を登る時には、梅干を口に入れて手を引いて登りましたよ。」

「さうさう、山口さんに私は梅干を頂きましたね。あの頃可笑しい事がありました。逃げる時、厚い紙に糊で銀を張つて、丈夫な切れで胴巻を縫つて、腹へ巻いて出ましたが、七月の落城ですから、初めは毎日毎日汗が出ますし、どこへ泊つても他人の中で、少しも體を離さないで、もう仙臺へ行つたころは、切も紙も切れてこぼれ出したのですよ。夜竝んで寝た方に、朝蒲團を上げるとき拾はれましたから、それは私のですと申した事がありました」と、金井の隠居は笑ひながらいふ。

「あなたはどこでお産みでした」と清野さんが山邊さんに聞く。

「私のお産いたしたのは仙臺の農家でした。旅でお産をなさるとはお氣の毒なといつて、よく世話をしてくれました。それで娘は育つたのでせう。あなたはどちらで」と金井の隠居に聞く。

「私は國へ歸つてからです。女の子はよそに預けてありまして、十三の長男を連れて居ました。お互様に家は焼けて無いのですから、近在の農家の離れを借りて居ました。丁度お産前に熱病をいたしました、頼んだ婆あさんが折折見廻つてくれる計り、長男に藥を取りにやりますと、持つて歸つて、煎藥を火鉢にかけて置いて遊びに出ます。ちよいちよい歸つては氣を付けてく

れますが、大熱でただうとうとと寝て居ました。若し此儘に死んだらと思ひ思ひ過しました。」

「そしてお子さんは」と聞く人がある。

「生れて十日ほどで死にました。死ぬ筈ですとも、懷妊中を旅から旅で暮して、國へ歸つて生みたいと無理をし通したのですもの。今頃の消毒の嚴しいお産を見ますと、好く命があつたと思ふのです。大抵あの時生れたお子さんはお育ちになつたのは無い様です。私は仕合せに其子をなくした計り、あとは身内の者で大勢戦争へ出ても、負傷しただけで、死んだものはありませんでした。」

「死んだといへば、清野さん貴方はお氣の毒で、なんと申し様もございませんでしたね。」

「ほんとお兄い様は新町口でお受けになつた創でお亡くなりになるし、御長男はまだ十七なのに戦死なさるし、あの時の事を思へば、氣性のしつかりした貴方だからお應へなすつたのですよ。さぞお辛うございましたらう。」

皆から見舞を云はれて清野さんがいつた。

「ええ。あの時は官軍からは兄の身寄りだと目をつけられるし、藩の方からは兄の爲めに戦争になつたと云はれて恨まれるし、長男も戦死してしまつて随分辛うございましたよ。あれから

建てた兄の墓も、二三度臺石などを壊されて母と一しよに泣きましたよ。」

僅か百二十石の小祿に身を起して、難局に臨んで執政となり、手腕を奮つて亂れた藩政を改革し、開戦の時は總督になつて、西軍を迎へて奮戦し、一旦落ちた城を恢復しても、終に敗れて戦死し、兇逆と云はれ、首謀者と云はれたが、世が治つて後は、惜むべき憂國の士を、外寇に死なせず内訌に死なせたと云はれたほどの河井氏が、修業中に郷里へ送つた手紙に、「男子にも候はば、共共出精可仕、女ながら少しは氣象も有之様存ぜられ」と書いてあつた此人である。それが年が寄つて、昔のやうにはなく氣も挫けてゐる。物の云ひ振りが流石にしめやかに見えた。

「でも幸に善い世の中になりました、兄も皆様から過分に褒めて頂いて、さぞ満足致して居りませう。」

「近頃大變立派な御本が出来たと云ふ事ですね。拜見したいと思つて居ます」と、金井の隠居はいふ。

「御長男の欽太郎さんの戦死なすつたのはどこでしたかね。」

「あれは二番敗れの時でした。誰も覺悟をして居ましても、あの小原さんのお内の様だと、お

驚きになるのも無理はありません」と清野さんが云ふ。山口さんがそれを聞いて云つた。

「いくら覺悟をしてゐても、村山さんの様に、御一家から家來迄幾人となく戦死なすつてはたまりませぬね。」

小原といふのは戦争の第一の戦死者だ、なんでも山の頂上から攻め上る敵を防いでゐて、一寸顔を出したのを一打に撃たれたのだ。それを戦友が苦ませては氣の毒だと、すぐ首を打つた。兼てから武士は戦場では命はないものと覺悟はして居る家内の者も、鐵砲の音がしはじめた計りなのに、首の離れた死骸を擔ぎ込まれたのだから、驚きの程が思ひやられる。其様子を見た人達が、たとへ本人には氣の毒でも、大抵の負傷までは一應の手當をして見る事にしよう、此時約束したといふ事だ。村山さんの家は、主人、弟其他の親族がよくもよくも死んだものだ。二人の後家さんも此會の仲間であつたが、數年前に死んでしまつた。

日はだんだん照つて来る。軒の青桐の廣葉の雫がすっかり乾いて、めつきり暑くなつて来た。金井の隠居は障子を廣く開けた。やがてお膳が並ぶ。一汁三菜のざつとしたものだ。皆甘いお酒を盃に一つ位で、燗酒の猪口を取るのは清野さんばかりだ。御飯になつて新漬を喜んで食へるのも此お婆さんだ。

「食事が済むと暫くして、『まあお横におなりなすつてゆるりとお休みなさい』と、銘銘に枕を出して渡す。あちこちで横になりながら話してゐる。

一體越後の人は好く晝寝をするさうだ。今は知らず、昔は晝から三時頃迄は、町を歩いても静かなもので、お晝寝時と云ふ詞さへあつた。話は果もなく續くけれど、新聞を読むのも、清野さん山邊さん金井の隠居だけで、目が霞んだり、子守が忙がしかつたりして、あとの人は讀んで居ないから、一しよに話す譯には行かぬ。兎角豆腐の串を二時間かかつて十本削つたとか、糞物を長くしてゐてめつきり目が悪くなつたとかの話になる。それから又しては知つた人の身の上話になるのである。

「今年はず蔵さんの七回忌ではございせんか」と金井の隠居に問ふのは富山さんだ。

「はい。さやうでございます、忌日は歳暮ですけど、嫁が學校の教員をして居ますから、替中休暇に墓参りに行きたいと云つてゐます。早いもので孫も大きくなりました。」

金井の次男は海軍少佐であつたが、旅順で戦死したのである。墓は先祖からの墓地に、目に立つのが建ててある。

「いつも夏になると泳に入らつしやると云つて、手拭を腰に下げて内の前を通つてお出ででし

たがねえ」と、富山さんは遠い昔の見える様な顔をする。

「遠くへ行つてはならぬと云ひ付けても、我慢が出来ず、内川へと云つて家を出ては、信濃川へ行ききました。私が叱ると思つて、門を出て右へ行くを見せて、左へ廻つて毎日行きましたさうです。やはり水ではてる人でしたね。私も九人の子供で戦争後随分難儀しましたが、もう三人しか残つてゐません。」

「私のは戦死などはしませんでした、病氣で三人亡くなりました。かういふ年になるまで生きて居ますと、逆さま事に逢ふのは當り前だと思ひます。まあ此四十年ほどの恐ろしい世の中の變りやうを見ただけが、幸といふものでございませう。」割合に波瀾の少なかつた生活の山口さんが云ふ。

「まあ、どうか體を大事にして、これだけのお仲間、いつまでも缺かさないう様に集りたいものです」と、口數の少い富山さんが云ふ。

「誰が先でせう」と、山口さんがいふと、話が變な事になる。

「瘦せて居る方は割合に強いものですが、私は太つて居ますから、中風になりさうです」と云ふのは山邊さんだ。

「近頃私はめつきり物忘れをしますが、先きが短くなつたのでせう。清野さんお年上だけれど御丈夫で、一番後にお残りなさるらしい。話相手がなくてお困りでせう」と、金井の隠居が笑へば、皆聲を合せて笑つた。

其時奥さんは美しい鉢へ粽を入れて持つて出た。眞青な笹の葉の三角を形よく菅で縛つたのが、五つづつ結んで水に入れてある。

起き直つたお婆さん達は「まあお珍らしい。」「よく笹がお手に入りましたね」などと口口に云ふ。金井の隠居はにこにこして。

「これは國の娘の所から送つてよこしました。どうぞ澤山召し上がつて下さい。黄な粉も國のが添へてあります。」

「お國では今御節句ですね。」

「これの子供の時こしらへて、粽が鼻をたらし居るのはお前だらうなど云はれて、腹を立てたものでした。」

「東京の好いお菓子よりも此方が結構で」などと、褒める人もある。暫くは粽の話が盛んであつた。(完)

## 紅入友染

解剖生理などの講義ばかりを聞いて居た醫科の學生達には、三回生となつて始めて患者を見るといふ事が、此上なく興味のある事であつた。

制服を着用すべしと云ふ訓示はあつても、教授達の早い講義を筆記するのに肩が凝るとか、歸りに友達の家へ寄るのに窮屈だとかいつて、和服を重に着てゐた人達も、云ひ合せた様に制服で、ツラウベだとか小澤式又は山本式と、好み好みの聴診器を隠しへ入れて出懸けて行く。

近頃は學生の数が非常に多いので、同級生といつても同じ高等學校から來た人達の外は、御互ひに顔の見覚えがある位で、一一名を覚える迄には行かぬのである。

東北の高等學校から來た一團は、二回の成績が思ひの外に揃つて善かつたといふので、一緒に來た十人は特別に親しくして、學校の外でもよく往つたり來たりしてゐる。

其中に競走の撰手が二人居た。一人は背は左程高くは無いがしつかりした體をしてゐて松下

といふ。一人は瘦せて非常に背が高く、楠といふ。「正成公の子孫か。今に位階が貰へるかもしれない」と友達がいへば、「今申請中です」と笑つてゐる。早く両親を亡くしたが、年の餘程違ふ一人の兄が、地方の病院長をして居て充分の仕送りをしてゐるとの事である。寄宿舎に居る中にも兄弟の多い松下の妹達などが、一口噺の様な手紙をやつたりなどするのを見ると、「妹があつていいなあ」などとよくいつた。

東京へ来る様になつてからは、空橋邊へ一緒に下宿をして居たりなどした。松下の家は大阪だとの事である。

十人の中に大川といふのが居た。年は仲間中で一番若い。廉の無い性質なので誰とでも仲善くする。此人だけ家が東京でお父さんは小官吏である。借家でないだけで狭い家にあるので、八十近いお祖母あさんに日當りのいい間はとられてしまつて、入口の傍の薄暗い北向の長四疊が其部屋になつてゐる。電燈電話附の立派な下宿に居る友達も、穢いともいはないで遊びに来る。中でも楠さんはどういふものか近頃は一段仲善くしてよくやつて来る。風でも引いて休むで居ると、すぐ見舞に来て碌に火もない瀬戸の火鉢を抱へていつ迄も話し込むで居る。時時は弟の五郎といふ子を相手にして、闘球盤などを出して遊んで行く事もある。

楠さんは小説も好きでよく讀む。夏目さんのものは猫からして大抵揃へて持つて居る。よく大川は自分の買つたのと取換へては讀むのである。門を貸して貰つた時に代助が崖の上の家を尋ねて、子供が人形の着物を干して置いたのを見るといふ所に圈點が打つてあるので、いつも「弟か妹がほしいなあ」といふのはほんとだなどと思つた。

長四疊の鴨居の上には好い畫のコビイだの、自分のやら人のやらのスケッチだのが懸けてある。大川は先生もなしにやたらに畫いてゐるのである。楠も好きなのでよく畫の話をする。

「昨日太田さんが又洋行をするつて暇乞に來たとさ、僕は留守をして残念な事をしたよ」と大川はいふ。太田といふのは大川の國の人である、まだ三十位であるが、五六年も洋行して居てミュンヘンの美術學校を卒業した。向ふでは大分書いたさうだが、歸つてからはまだあまり書かない。昔からよく歌留多などを取りに來て心安くして居るのである。

「まだ去年歸つた計りだといふぢやあないか。」

「もう一遍行つて來るとさ、此部屋を通りぬけてね、僕があつた『浴場にて』の畫をコビイしたのを見て、文展へ行つた時に裸體は丁寧によく出來て居るが、皮膚に湯上りといふ潤みのある感じがしなかつたといつたとさ。肖像畫を書くのに、三日四日で好く似るのが出來上るの

が、餘り早いと人が信用せぬし、いぢれば悪くなるばかりだから、羽織の紐などを幾度も書き直して、暇をつぶして居るつていつたさうだが、ほんとかねえ。」

「どうだかねあ。僕達の様な暇のない者の習ふのには早いといふのも一種の取柄だねえ。」

「等身大のコビイをするのに一週間あれば充分だとさ。何か知らんが來年は歸るさうだから、アトリエへ入れて貰つて見たいねえ。」

「僕も是非頼むよ。」

こんな話をして居るとお祖母さんが羊羹か何か持つて來る。

「私の貰つて置いたのだが一つお上りでないか、お佛壇の傍にあつたのだから御線香の匂ひが移つて居るかしら。私は鼻がきかないから分からないよ。」

もう紅茶とデセル位食べて居るのに、楠さんは又それを食べて話し込む。

學校の暇の時には肩へ畫の具箱を懸けて、三脚を持つて郊外へ二人連れて寫生によく行つたが、楠は競走の撰手だし、其去年などは高飛びのレコードを破るなどといつて居たから、秋の時候の好い時にはあまり一緒に出られぬのを残念がつて居た。

そんな風だから忙しい講義や實習の暇を偷んでも、電車の飛び乗りをしては、上野の文展は

云ふ迄もなく、赤坂の三會堂で開くドロオイングやエツチングの展覽會迄、分らぬなりに覗きに行く。

時によると今日は歩けるだけ歩いて見ようなど行つて出懸ける時もある。すぐれて背の高い楠さんは思ひ切つて長い外套を着て歩く。或る日連れ合つて出て行くのをお祖母さんは窺から見送つて居たが、夕方歸つた孫に云つた。

「涉や。今日は楠さんは變な物を着て來ましたね。おころもの様に見えたがあれは何だい。」

「お祖母さん、僕と同じ外套ですよ。三越でこしらへたとかいひましたつけ、切地が餘程澤山いつたさうです。外に腰きりしか無いのも持つて居ますよ。」

「おやおや三越でもあんな物をこしらへますかね。私は美しい着類や何かが重な物かと思ひましたよ。」

と呆れてゐる。學生の服は本郷の小松屋でなくては出來ぬ物と思つて居るのである。

「さうさねえ、お祖母さんの驚くのも無理はありませんよ。あの男がああ長いのを着て本郷通りを歩いて來るのは、半町位さきから分るからね。さうさう、地方に居た時友達が馬と仇名を附けましたよ。」

「馬つてかい。昔私共は顔の長い人の事を云ひましたよ、あの人はさうは見えない、立派な顔をしてゐるぢやあないか、もつとも目が悪いからね」と目鏡をはづして息をかけ、半ケチで頬に曇を拭いてゐる。

「何ね、往來で馬が行き逢ふと皆立止つて楠に挨拶をして行くから、いづれ親類なのだらうといふのです。」

「いかなこつても」とお祖母さんはもう相手にせぬ。湯呑についだお茶をふうふうと吹きながら知らぬ顔をして飲む。

「何ね、お祖母さん、楠さんは早く驅けるからそれで馬なのでせう」と、八つになる弟はさも發明した様な顔をする、涉はにこにこ笑つて居た。

こんな工合で大川の目にうつてゐる楠は、人なつこい晝の好きな、よく驅けて甘い物を澤山食べる人位にしか思はれないのである。「あの男もよく飲む」とか、「なかなか油断はならないよ」とか、友達仲間でいふ人はあつても、「僕は飲む楠とは附合はないから知らないよ」と云つて、大川は平氣でゐる。

學生の大部分は臨床家になるのが目的なのだが、中でも内科の外來の日は皆非常に熱心であ

る。區役所傍の門を這入つた左側の外來診療所の前は、早朝からいつも込み合つてゐる。今日は小澤先生の診察日だとして患者は澤山に来て待つて居る。

三四人の助手はざつと一遍目を通して、學生達の爲になりさうな病氣のものだけを選んで豫診室へ廻す。残りは自分達が見て、處方をやつて歸すのである。

豫診室は患者とそれの附添、あとは學生で一ぱいである。一人の患者に學生の二三人は懸つて居る。患者といつても普通なのは少ない、大學迄持つて來る迄には、方方の醫者や病院を廻つた果が多い。はるばる地方から出京したのもある。皆で相談して病名を書いて病人と一緒に先生の診察室へ廻す、先生はそれを順序に診察して、病名の間違つたのは教へ治療法を問ひ、再來にしたり入院をさせたりするのである。

學生の豫診が一段落済むと、先生の來られる迄に、今見た病人の治療法を、先生の面前でまごつかぬ様に話さうと思つて、索引の様なものを繰返すのもあれば、「誤診でなければいいが、どうも怪しいからなあ」と心配氣な顔をするのもある。こちらの暖爐の傍では四五人寄つて雑談をしてゐる。

「おい君のは何だつたい」と、恰度傍に居た松下に大川は聞いた。



「美人だよ」と、煙草の吸殻を捨てながらいふ。

「何をいふんだい、病症を聞いてゐるのに。」

「相變らず結核さ。多いもんだねえ。今日の患者などは可哀さうなものさ、熱はあつてもまだ寝る程ではなし、又寝かしても貰へないし、夕方からは氣分が悪いの、客に呼ばれば出懸けて行つて、歌をうたつたり酒を飲んだり、面白さうな顔をして、どうしても夜更しをせねばならず、體のつづく中はかうやつて居なければなりませんといつて居たよ。君のは。」

「僕のは上顎のカルチノオムさ。」

「ああ癌かい、又此間の様に半面をそぎ取るのかなあ。」

「癌といへば昨日の手術は大變だつたぢやあないか、ねえ、大川君。」と云ふ人がある。大川は振向いた。

「ああ餘程太い動脈を切つたんだね。廻り一面に血が飛んだ。僕は馴れないから驚いてしまつた。」

「僕は何だか歸つてからも血腥い様な氣がして、急いで湯に入つて來たよ」といつてゐる。前日乳癌の手術の時、手術服を着た先生はいふに及ばず、助手學生看護婦迄立竝んで居た白服の

人は、残りなく一面に飛白の様に血をあびたといふのである。其時一人の學生は大川の肩を叩いた。

「おい君は知つてゐるかい、あれを。」指さされた方を見ると、少し遅れて來た楠が頻に患者の容體を聞いてゐるらしい。

「何でも無いぢやないか。」

「君の所からは見えないんだ、もつとこつちへ寄つて見たまへ」と引張つて行く。成程間に居る人の蔭で見えなかつたが、楠は今隠しから紅入友染の美しい袋に這入つた聽診器を取り出して診察を始める。黒い服か白い服か、患者の服にも何一つ目に附く者もない、白壁の廣い豫診室で、紅入友染の袋はひどく目を射た。楠は病人の方に氣を取られて居るから、此方の方には氣が附かない。

「君は知つて居るだらう、あの袋の來歴を。」

「いや、知らない、始めて見るよ、いつから持つて居るのかしら。」

「一昨日遠山先生の診察の時にも持つて居たよ、僕などが聞いても云ふまい。君は心安いから、探つて見たまへ。」

「あいつは妹でもあるのかい」と聞く人がある。

「そんな者はないよ。」

「それぢやあいよいよ怪しい。是非聞いて見たまへ。僕達は賭をして居るのだから。青木堂の西洋菓子位奢るよ。」

其時廊下の方から小使が呼ぶ。

「皆さんディアグノオゼが出来ましたら出して下さい、先生がお出になりますから。」

此小使はなかなか氣のきいた男である。お仕着せの黒い木綿に緑の筋の入つた小使服の下に氣取つたチョッキを着て、それに黄色の鎖を懸けてゐるのが見える。馴れない學生達に種種の事を教へて呉れる。背は低いが立振舞が敏捷だ。長年勤めて居ると見えて、よく獨逸語を使つてゐる。

入口に近い人がドアを開けるとき、小造りの小澤先生が金縁の眼鏡をかけ、袴と袖口とにことごとしい毛皮のついた外套に埋まつて、葉巻を銜へながら這入つて來た。

其晩桶は又大川の家へ話に來た。

「今日皆が君の聽診器の袋の來歴を僕に聞いて呉れと云つてゐたよ。何だか大變に面白がつてゐたづけ」と言つて見た。自慢に話するか、それとも赤い顔でもするかと思つたら平氣でゐる。

「あれかい何でも無いのだよ。面白がる奴には勝手に面白がらして置きたまへ。」かう云つた切りで、すぐ外の話をする、平生心安いだけ却つて深く立入つても聞かれない。學校の友達は聞いたか聞いたかと毎日の様にいふが、大川はまだ其儘に過してゐる。そのうち紅入友染も少し色が褪めて來た。(終)

## 後記

私も七十路を越しまして、両親兄達よりもいつか生き延びて仕舞ひました。長兄と別れてから二十餘年、次兄と別れてから三十餘年となります。一人の弟もはや還暦を過ぎました。長兄の事は、世を擧げてともいふ様に、誰も誰もが長年の間に、言ひ盡し語り盡して下さるのを喜ばしく思ふにつけ、次兄の事は全く世に忘られて居りますので、私が臆氣な記憶を辿つて書きましたのも、せめて幾分世に残したいと思ふからなのです。森一族、小金井一族の事も、知る限りは書いて置きました。大抵は與謝野兩先生の御厚意によつて「冬柏」に掲載したもののなです。最早兩先生とも御逝去になつた事を誠に残念に思ひます。添へました小説三四篇は「昂」その他へ載せたので、皆はかない昔語りでございます。

臺灣に居ります森於菟が、本の出来ますのを喜んで、送つてまわりました手紙を序にかへます。末ながら、装幀を給はりました石井拍亭氏と、種々御配慮を煩はしました横山重氏とに、

厚く御禮を申し上げます。

昭和十八年七月


小金井喜美子

### 著者略歴

明治四年、島根縣津和野に生る。  
 明治六年上京、向島牛島小學校から 住小學校卒業、明治廿一年お茶の水高等女學校を卒業す。  
 東大教授小金井良精に嫁す  
 長兄森林太郎主宰の「構草紙」に寄稿す。明治三十年、森林太郎と共著「かげ草」を春陽堂より刊行す。  
 昭和初年より、與謝野寛、晶子氏に師事して、和歌の添削を受くる傍、雑誌「冬栢」に文章を連載して、今日に至る。  
 昭和十五年、歌集「泡沫千首」を刊行す。自家出版なり。

昭和十八年十二月十五日 印刷  
 昭和十八年十二月二十日 發行

出版者承認 210261 號  
 2,000 部



發行 大岡山書店  
 東京都赤坂區水川町九  
 振替東京六四九五二番  
 會員番號第一〇五〇一三號

著者 森鷗外の系族  
 定價 六圓  
 特別行 二十錢  
 税別額 十錢  
 合計 六圓二十錢

發行者 長井秀雄  
 東京都赤坂區水川町九番地

印刷者 相原太郎  
 東京都神田區三崎町二ノ一  
 (東京四九六九)

配給元

東京都神田區淡路町二丁目九番地  
日本出版配給株式會社

合名會社 新陽堂印刷所

IJ-34

終